

目 次

2017年秋季研究大会シンポジウム:女性と母の哲学の展開:フランス哲学を出発点にして

.....	河野 哲也	1
世代関係理論の試み——フランス女性哲学者たちの読解から出発して—— 棚沢 直子	2
「産む性」をめぐる——生殖と「母性」再考 中 真生	11
バトラーからボーヴォワールへ——ボーヴォワールにおけるジェンダーと両義性の倫理 藤高 和輝	25

2018年春季研究大会シンポジウム:17世紀の哲学と科学——デカルトとライプニッツ——

はじめに 香川 知晶	36
デカルトのアナログア——知の統一のための比較と類比としての結合的認識法—— 佐藤 真人	37
ライプニッツにおける観察システムのアイデア——その保健・衛生行政構想を手引きに—— 長綱 啓典	52
ライプニッツにおける「通俗哲学」と「経験哲学」の意味 酒井 潔	66

2017年秋季大会発表要旨

デカルト『精神指導の規則』における確実性について 有賀 雄大	83
バッシュアールの化学哲学における分類論の検討 上野 隆弘	84
シモンドンにおける「前個体的なもの」概念の再考 宇佐美達朗	85
ジャン・イポリットの問題系 得能 想平	86
後期デリダにおけるハイデガーの遺産相統一『法の力』と正義 大江 倫子	87
不連続な時間の哲学——ジャンケレヴィッチとレヴィナス 奥堀亜紀子	88
デリダと歴史主義のアポリア——フーコー論からグラマトロジーへ 亀井 大輔	89
「優美」を巡る思索の限界とその意味——ベルクソンの「優美」を中心に—— 北 夏子	90
大他者への侮辱——ラカンによるプラトン『饗宴』注釈—— 桑原 旅人	91
デカルト渦動説の成立——原理と現実のはざままで 佐藤 真人	92
マルブランシュの「神の一般意志」からルソーの「人民の一般意志」へ 竹中 利彦	93
複数世界は存在するか——マルブランシュにおける神の選択と自由と—— 橘 英希	94
デカルト形而上学における「経験」の機能——「直観」および「知解」との対照において—— 田村 歩	95
ジル・ドゥルーズ『差異と反復』における回帰と信 戸澤 幸作	96
臆病さは悪を招くか——レヴィナスとヴェイユ 根無 一行	97
『創造的進化』における〈生命〉探究の方法——〈経験に基づく推論〉の解明 野瀬 彰子	98

現在主義の起源 —— 『物質と記憶』における「私の現在」をめぐる	原 健一	99
トゥールーズで発見されたデカルト『省察』印刷前の写本をめぐる	平松希伊子	100
ベルクソンの形而上学における実証性について	持地 秀紀	101
アンリ・ルフェーヴルにおけるスタイルと欲望 ——「人間の生産」と『空間の生産』の接合点をめぐって——	山本 千寛	102
artificeの哲学と〈雀蜂・蘭〉の機械状生態学： フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス草稿』	山森 裕毅	103

2018年春季大会発表要旨

ジャン＝リュック・ナンシーの哲学における空間的な形象について	市川 博規	104
後期デリダにおけるハイデガーの遺産相統一『他の呷』と歴史性	大江 倫子	105
レヴィナス『全体性と無限』における「語り」について ——ベイトソンを手がかりに——	岡本かおり	106
1960年代のジャック・デリダにおける想像力と自己の問題 ——『グラマトロジーについて』におけるJ.J.ルソー読解を中心に——	小川 歩人	107
デカルトの生得観念について	久保田進一	108
「フーコーにおける「想像力」の問題」	小嶋 恭道	109
メルロ＝ポンティにおける「類型」 ——ソルボンヌ講義の文化人類学解釈を通して	酒井麻依子	110
スピノザにおける時間の存在論的定位置	田上 慧	111
ベルクソンにおけるテキスト解釈学の基礎づけ ——技術的解釈の可能性——	長谷川暁人	112
『千のプラトー』における言語学受容について	平田 公威	113
実効的自由と真理 ——メルロ＝ポンティの動機づけ概念をめぐる——	横田 仁	114
東西思想の結節点としての無知に分類される想定外の事態 デリダの脱構築論と東洋思想の無に関する考察を通じて	渡辺 貴史	115

公募論文

プルドンと社会契約論	伊多波宗周	116
シモンドンにおける「前個体的なもの」概念の再考	宇佐美達朗	128
ドゥルーズにおける「可能的なもの」の概念再考——最初期論文群から晩年までを貫くものとして——	小倉 拓也	140
デリダと歴史主義のアポリア——フーコー論からグラマトロジーへ	亀井 大輔	152
老化の対人関係——レヴィナスにおけるプルースタから——	古怒田望人	163
デカルトはラムス主義者か——初期デカルト認識論に見る数学的方法の一側面	佐藤 真人	174
精神から有機組織へ——シャルル・ボネの唯物論的心理学	沢崎 壮宏	187

マルブランシュの可能世界論と最善世界の複数性	橘 英希	199
デカルト「第二省察」における「 <i>pronuntiatum</i> 」としての Cogito について ——ストア学派論理学における「 <i>ἀξίωμα</i> ; <i>axioma</i> 」概念との対照による哲学史的 Cogito 解釈——	田村 歩	211
メルロ＝ポンティにおける知覚経験の未規定性	田村 正資	223
ベルクソンにおける〈生命〉探究の方法の発展	野瀬 彰子	235
ラカンのヘノロジー——プラトン『パルメニデス』を中心に——	信友 建志	247
あなたの声が、音ではなく、言葉として私に届くのはなぜか——ベルクソンおよびソシュールの理論による言語理解と共感のモデル化——	長谷川暁人	259
狂気の呼び声——フーコーの超越論的考古学とその自己解体	藤田公二郎	271
ラカンにおける構造と歴史——「シニフィアンの論理」について	松本 卓也	282
Raymond Aron, critique de Foucault. À propos du dialogue de 1967	Yasutake MIYASHIRO	294
『創造的進化』におけるベルクソンの「ポジティヴィスム」	持地 秀紀	305
自然的システムとしての生物——ベルクソンとル・ダンテクにおける個性性と老化の問題——	米田 翼	317

書評

村上靖彦著『母親の孤独から回復する 虐待のグループワーク実践に学ぶ』	村松 正隆	329
杉本隆司著『民衆と司祭の社会学——近代フランス〈異教〉思想史』	安孫子 信	334
加國尚志著『沈黙の詩法——メルロ＝ポンティと表現の哲学』	田村 正資	337
上尾真道・牧瀬英幹編著『発達障害の時代とラカン派精神分析 ——〈開かれ〉としての自閉をめぐる』	小泉 義之	341
山口裕之著『「大学改革」という病——学問の自由・財政基盤・競争主義から検証する』	坂本 尚志	346
森元斎著『アナキズム入門』	伊多波宗周	350
渡辺洋平著『ドゥルーズと多様体の哲学 ——二〇世紀のエピステモロジーにむけて』	近藤 和敬	354
平井靖史・藤田尚志・安孫子信編『ベルクソン『物質と記憶』を診断する： 時間経験の哲学・意識の科学・倫理学への展開』	國領 佳樹	359
合田正人著『入門ユダヤ思想』	伊原木大祐	364
千葉雅也著『勉強の哲学——来たるべきバカのために』	津崎 良典	369
石原幸二・河野哲也・向谷地生良編『シリーズ精神医学の哲学3 精神医学と当事者』	伊東 俊彦	374

会員の声

『実在への殺到 Real Rush』 清水高志著	中富 清和	379
--------------------------	-------	-----

その他

日仏哲学会 2017 年度 (2017 年 9 月- 2018 年 8 月) 活動報告	381
日仏哲学会入会手続きについて	386
2019 年春季・秋季大会一般研究発表応募要領	386
『フランス哲学・思想研究』公募論文応募規定	387
「会員の声」投稿規程	387
日仏哲学会若手研究奨励賞規定	388
日仏哲学会会則	388
編集後記	390
Sommaire	